

インフラに関わる地域の人々 —みんなで創る懐かしい未来—

Local people involved in infrastructure
—A nostalgic future created by all of us—

特集担当主査：浅野和香奈

特集企画担当：天沼稚香子、井上亮、川口大輔、川口暢子、川島陽子、後藤千恵、眞鍋政彦、上田晴斗、海崎真穂

ABSTRACT

People take care of the community's infrastructure. In this feature, we focused on people proactively involved in local infrastructure to address issues in their communities and nurture local lifestyles through civil engineering works together with the background and thoughts they have in mind. Starting with an interview with the mayor of Hirata Village in Fukushima Prefecture, who initiated a collaborative village development program, this report introduces cases from five perspectives: aging and declining population, aging agricultural facilities, technological succession, increasingly severe disasters, and abandoned railway lines and roads. The report also presents initiatives to address generational succession of community activities. Finally, the report presents the value of residents' proactive involvement in local infrastructure and looks ahead to the future. We hope that by the time you have finished reading this report, you will be able to envision a bright future for your community through civil engineering.

地域の暮らしを写す1コマ

稲刈りが終わった2023年11月

上旬。私たち編集委員は福島県平田村で橋のセルフメンテナンスを行う地域の人々の取材を進めていた。

田んぼの方から男性の声がする。「おーい！ 何してるんだい？」聞き慣れた声に、作業をしていた住民らが後ろを振り向く。「この橋の点検と掃除だよ！」そこから顔なじみの地域の人々の立ち話が始まった。秋の冷たい風が吹く中、暖かみのある訛りがとても心地よい。同行していた写真家の山崎エリナさんがファインダーをのぞいた(写真1)。心む日常の一場面を切り取ったこの写真からは、人々が育んできた地域の暮らし

や関係性が垣間見えるのではないだろうか。

土木を通して地域の暮らしを創る

地方は今、写真のような地域の暮らしが守れなくなってきた。なぜなら、人口減少、高齢化、過疎化など、都市に先行してさまざまな課題を抱えているからだ。

しかし、そんな中でも、課題に立ち向かい、自分たちの地域を守り、より良い暮らしを創ろうと努める人々がいる。

本特集では、地域が抱える課題に対し、地域のインフラに主体的に関わり、土木を通して住民の力でより良い暮らしを創る人々に着目し、そこにはどんな背景があるのか、思い

があるのか取材した。ここでの地域のインフラとは、人や物の移動を支える道路施設、食料生産の基盤である農業施設、公園や駅など、地域の人々の日常生活を支える基盤となる施設や設備のことを指す。

本特集の構成

本特集は四つのテーマで構成している。

まずは地域の移り変わりや実情を知ることを目的に、福島県平田村の澤村和明村長に学生編集委員がインタビューを行った。住民が主体となつて地域のインフラの整備などを行う、協働のむらづくりを進める理由について、率直に、丁寧に語っていただいた。

次に、地域の課題に対し、住民がインフラに主体的に関わる事例について、「高齢化・人口減少」「農業施設の老朽化」「技術継承」「中山間地でのインフラ保全」「廃線」の五つの切り口からそれぞれの取り組みについて紹介する。一つ目は高齢化・人口減少による地域消滅の危機に立ち向かうべく、自分たちで地域の憩い

の場にキャンプ場を整備しようと立ち上がった、熊本県天草市本町鶴地区での「本町鶴まちづくりの会」の挑戦、二つ目は農業の担い手の負担を軽減し、農業用施設の修理や長寿命化などの共同活動の技術支援を行う、三重県多気町勢和地域での「水と里サポート隊」の活動、三つ目はみかんの段々畑の文化的風景である石積みの技術を伝承し、持続可能な修繕サイクルの確立を目指す、愛媛県西予市明浜町で活動する地域おこし協力隊の方のチャレンジについて、それぞれ原稿を寄せていただいた。四つ目は過疎化、高齢化が進む中山間地域で農道や水路の保全管理、ビオトープづくりだけでなく、豪雨災害の復旧作業なども行った、山口県阿東嘉年地区での「阿武川源流保全会」のこれまでの軌跡と課題について、五つ目に思い出の鉄道の廃線跡地を活用し、駅舎でのカフェの運営や周辺の整備などを行う、地域住民で結成した愛知県豊田市名鉄三河線旧・西中金駅周辺地域での「西中金駅愛護会」の発足の経緯やこれからの展望について、それぞれ現地でのインタビュー取材を行った。

これらの個別の事例を受け、多くの地域で課題となるであろう「世代継承」の問題について、桑子敏雄氏に、実際に自身が関わった取り組みを元に「世代をつなぐまちづくり」について寄稿いただいた。

最後に、神野直彦氏、徳永達巳氏、後藤千恵氏の鼎談により、地域のインフラに住民が主体的に関わり、整えることの価値を見つめ、未来の暮らしの在り方について展望した。

土木を通して地域の明るい未来を描く

本特集で示したような、課題を自分ごとと捉え、地域のインフラに主体的に関わり、土木を通して住民とともに良い暮らしを創る取り組みが各地に広がることは、地域に明るい未来をもたらすのではないだろうか。きっと、本誌の中には読者が関わる地域にも生かせるヒントがたくさんちりばめられているはずだ。読み終わったころには、おのおのが土木を通じて、懐かしくも新しい、魅力ある地域の未来を描くことにながったらともうれしい。



写真1
ふと始まった地域の人々の
並ち話 (撮影：山崎エリナ)